

日本文化圏の深層

The Depths of the Japanese Cultural Sphere

平澤 洋一 Yoichi HIRASAWA

城西大学
Josai University

松永 公廣 Kimihiro MATSUNAGA

摂南大学
Setsunan University

鄭 淑源 Zheng Shuyuan

前北京 NTT データジャパン
Pre-BeijingNTT Data Japan

要 旨

日本の言語地理学は音韻・文法・語彙・人間行動などさまざまな特徴を手がかりにして調査語の分布を地図に描くことで、新旧・優劣・変化過程・伝播方向・方言区画などを明らかにしてきた。また、文化言語学は「言語は文化を映している」として、日本文化に関するさまざまな調査結果を提示してきたが、日本全域の文化圏の深層を地図上に描いた文献は管見に入らない。本研究は日本文化圏の深層、および現在にいたる歴史的变化過程をいくぶんなりとも明らかにすることを目的とする。本稿はその第一段階をなす。

Abstract

Holding various characteristics such as a phenomenon, a vocal sound, a vocabulary, a human behavior etc as a clue, and illustrating the distribution of language investigation results in a map, the Japanese linguistic geography clarified a spread direction, a dialectic division in the old and new, the superiority and interiority, a change process. Under a concept of “language reflects culture”, the Cultural linguistics presents various investigation results, but the author has not seen yet maps showing all over Japan’s cultural depth in its sphere, and to make clear somewhat the historical changing process on today’s view. This paper may be a starting point in the henceforth researches.

1. はじめに

文化が言語に反映されるとすれば、言語を調査することによって共時的な文化圏の分布や歴史的な変化過程を明確にしていくことができるはずであるが、これまでの方言研究の多くは単語の調査・分析に終始してきた感が強い。

単語、とりわけ名詞語彙は、豊富な意味量を担うことができるものの、単語の集合だけでは文化の総体を表すことなどとうていおぼつかない。文化は単語や構文で表現できるものと、非言語でしか表現できないものとの総体である。したがって、文化の調査には、それなりの配慮と工夫が求められることになる。

文化の調査対象は、天地自然から動物・衣食住・身体・しぐさ・行動・感情・遊戯・習俗・交通など広範な分野にわたる精細なものであることが、もとより望ましい。理想像は将来に委ねざるをえないものの、その第一段階として(1)これまでの通時的研究成果を整理して日本文化圏の深層を探り、(2)自然文化圏・食文化圏・習俗文化圏・しぐさ文化圏などについての共時的実態調査に向けた考察を行う。

本稿は日本文化を原始から現代にいたる歴史的な変化の中で理論化してから「情報学」と融合させて日本文化圏を描きださせ

ようとする研究の第1段階にある論文である。この第1段階後半では、1)自然文化圏・食文化圏・習俗文化圏・しぐさ文化圏などについて先行研究を整理して日本文化の深層に関する問題点を絞り出したあと、2)平成3年の「多文化調査」の結果⁽¹⁾を参考にして作成した調査票を用い平成22年に東日本の若年層を対象に面接調査をおこなって現代文化圏を地図化する。

これに続く第2段階では西日本若年層および全国老年層の調査(臨地調査およびWeb調査)の結果を統計処理して現代の小文化圏を地図化し、第3段階では原始から各時代の文学・民俗等の文献データを情報処理することによって第1段階と第3段階の間のデータの空白を埋めながら、小文化圏の境界線と変化の過程を検証していこうとするものである。

『日本言語地図』はで国立国語研究所の一大事業であり、その完成が日本の言語地理学に資した役割は大きかったが、自然文化圏や行動文化圏等いくつかの視点から「日本文化圏」の地図を作成するのが、本研究の上位目標である。現時点での調査の規模は小さいものの、少しでも文化圏の歴史的な変遷過程が読み取れるような地図が完成できるように、調査項目を精選して有効性の高いデータを収集し、文化学と情報学の融合という

研究目標が実現するようにしたい。

2. 二重構造論の根拠

日本人はどこからきたのか？ 日本人の起源については、人類学では混血説と変形説が対立して議論され、「旧石器時代人につながる東南アジア系の縄文人が居住していた日本列島に、東北アジア系の弥生人が流入して徐々に混血して現在にいたっている」とする埴原和郎の二重構造論^[1]が学説の主流のようだ。北方人基層説では北方大陸から来た縄文人の基層に南方からの弥生人の上層が重なったとし、逆に南方人基層説では南方から来た縄文人を基層にして北方からの弥生人がその上に層をなした^[2]とする。鹿児島県曾於郡財部町の耳取遺跡で約2万4千年前のものとされる軟質シルト質岩の線刻礫が出土したことから、この時すでに日本人の祖先が南からも移住していたとする説^[3]もある。

1992年、大阪医科大学の松本秀雄は、南方から渡来した民族が琉球諸島・奄美大島を島伝いに遡上して原日本民族を形成したとする南方説は受け入れ難い^[2]とした。松本は、人種の違いが識別できる血液型である「Gmab³st 遺伝子」の調査結果を公表し、

- (1) ロシア・バイカル地方から中国北部・北朝鮮・韓国・日本一帯に同系統の遺伝子型が見られる。
- (2) 原日本人が日本列島へ渡来した時期は、朝鮮民族の祖先の集団と同時期か、あるいはそれに先立つ時期（今から約1万数千年以上前）であったと考えるのが自然であろう。
- (3) 日本人は南方型蒙古系と北方型蒙古系に大別され、ほとんどは北方型である。アイヌは北方型に属する民族である。
- (4) 北方型と南方型モンゴロイドとの混血率はせいぜい7～8%である。
- (5) アイヌと佐渡島・奄美大島・宮古島・石垣島・与那国島との間には等質性がある。これらの地域の人々は一般日本人に比べると、より高い頻度の青の ag 遺伝子と、より低い頻度の赤の afb1b3 遺伝子をもつ。アイヌと宮古は、一般日本人集団に比べ北方型蒙古系民族の特徴を一層強くもっており、南方型の影響をより少なく受けていて、一般の日本人集団よりも古い集団である。

このような点を明らかにした^[4]。これらの集団分布は、日本の方言や習俗の分布から見てもみても首肯できる。Gm型は「人種を識別できる血液型」であり、「人類遺伝学的な研究、とりわけ、人種の識別、民族の特徴づけや、特異な遺伝子の存在を目安にして、遺伝子の流れとか遺伝的浮動とかいった事柄を含めて、先史時代の民族の移動や、混血といった問題の研究をすすめるために、有用な遺伝組織として注目されて」^[5]であり、先史時代の生活集団や人種を識別できる点は、文化や言語の系譜を考察する上でも有力な研究法といえる。

また、2008年9月には理化学研究所が7000人以上の日本人の常染色体上のDNA塩基多型情報の解析を行い、日本人の集団は本土クラスターと琉球クラスターに2分され、本土は6クラスター（北海道・東北・関東甲信越・東海北陸・近畿・九州）に分類される^[6]とした。この分類は、松本説や日本の方言・

習俗分布とも矛盾しない。

加藤晋平(1988)は、東日本に分布するクサビ型細石核をもつ細石刃文化を担った集団の技術はバイカル湖周辺から拡散してきたものであるとし、その時期は1万2,3千年前であったとするが、佐々木高明(1993)も肯定的^[7]である。

しかし、松本のバイカル地方起源説に異論を唱える専門家も少なくなかった。尾本恵市・斎藤成也は、すべての日本人の故郷をバイカル湖畔とする松本の説は、埴原を含め日本の人類学者らの強い反論に合い、人類の個体群の起源についての判断は単独ではなく多くの遺伝子座の情報に基づくべきであるとした。

3. 渡来時期

大陸から日本へいつ頃渡来してきたのか？ これについても、諸説いろいろである。加藤晋平説では今から1万2,3千年前、松本秀雄説では約1万数千年以上前、国際日本文化研究センターは「20万年前アフリカの地を出た新人が5～7万年前に中国に達し日本には3万～1万2千年前までの間に断続的に流入した」^[8]とする。また、鹿児島県大隅半島の耳取遺跡から軟質シルト質岩の線刻礫^{せんこくれき}が出土し、約2万4千年前のもの^[9]とされた。

篠田謙一の説では、日本列島に移住者がやってきたのは4万～3万年前と推定^[10]されている。

さらに、これらより大幅に古い12万年前頃の地層から旧石器代中期の石器類が発掘された（島根県砂原遺跡）との報道もある^[9]。ただし、今のところ日本人かどうかは定かではないようだ。

渡来の時期と関係の深いのが居住人口である。国立民族博物館の小山修三(1978)は、縄文時代は東北・関東・北陸・中部・東海・九州の人口構成比が高く、近畿・中国・四国は縄文晩期(2900年前)から勢力を広げてきた地域である^[11]とした。

そこで注目しておきたいのが篠田謙一(2007)の説である。DNA分析をもとに、示唆に富んだ指摘をしている^[12]。

- (1) 男性の移住者がやってきて先住者の女性との間に子どもができた場合、その子どもがもつ先住者由来のDNAは半分になるが、常に娘が生まれて子孫を残していけば、子孫のミトコンドリアDNAは先住者のものと同じになり、ヒトの正確な拡散の過程を追うには、ミトコンドリアDNAとY染色体の遺伝子の双方を解析し結果をもって描く必要がある。
- (2) 日本人集団にはアジア集団にはほとんど見られないハプログループが二つ存在する。一つはM7aで沖縄集団の中でとくに高い頻度で存在し北海道縄文人や関東縄文人にも見られる。他の一つはN9bで、北海道縄文人の大部分がこれを有し、東北地方に高く、南に行くほど頻度が低くなる。
- (3) 塩基置換の比較的起こりにくい遺伝子をコードしている部分の突然変異を分類基準にした「ハプログループ」による分類では、北東シベリア・アムール川流域の漁労民をルーツとするハプログループYのDNAがアイヌの人たちに受け継がれた(図1)。
- (4) 縄文人(北海道縄文人、関東縄文人)と現代日本人(現代北海アイヌ、現代沖縄、現代本土日本)のハプログループ頻度を比較すると、北海道縄文人は現代日本人3集団とは目立って異なる近縁関係にある(図2)。

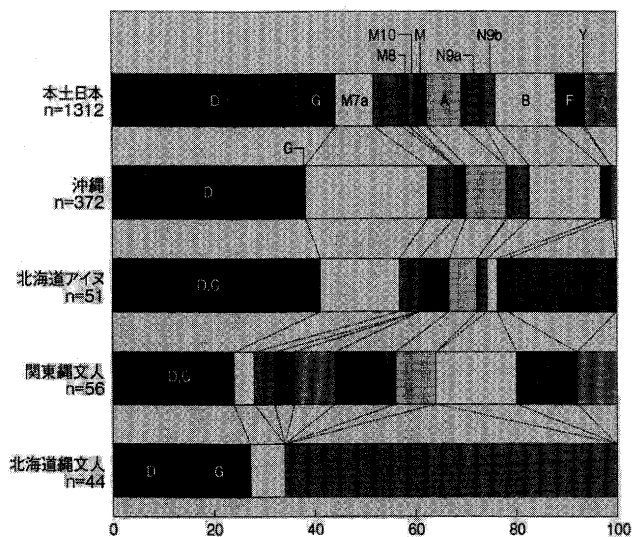


図1 ハプログループ頻度 (篠田謙一 2007)

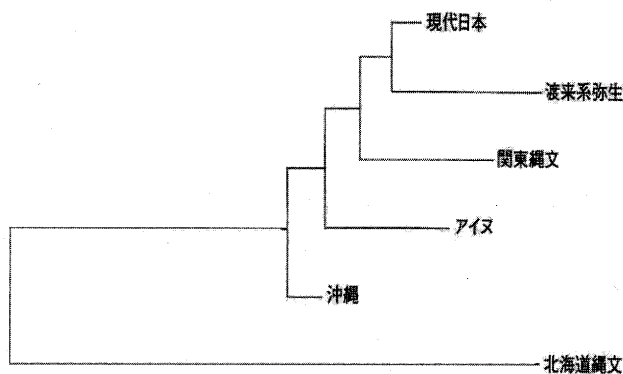


図2 現代日本人と縄文人の近縁関係 (篠田謙一 2007)

- (5) 北海道縄文人はハプログループ N9b が 65% 以上を占めて他の集団とは著しく異なる。
- (6) 関東縄文人は、現代日本人に多いハプログループ D がそれほど多くはなく、東南アジアとのつながりをもつハプログループ B や F、中央アジアに多く見られるハプログループ M10 など存在して複雑である。
- (7) 「ALDH2 変異型遺伝子」をもつ人は近畿地方を中心とする地域に多く、正常型は東北・四国太平洋側・南九州に多い。
- (8) ハプログループ M7a 遺伝子の割合は、沖縄で 24.0%、奄美で 16.2%、宮崎で 13.5%、名古屋 7.5%、東京 6.3% であり、沖縄から北に向かうほど頻度が落ちる。このグループは非常に古い時代に南方から日本に入ってきたと考えられ、ハプログループ M7a が南方系縄文人の DNA とすれば、沖縄の集団は北海道のアイヌと並んで縄文人の形質を色濃く残していると主張する形質学者たちの二重構造論にも合致する。
- (9) 貝塚時代には、沖縄諸島と先島諸島は異なる文化圏に属していたと考えられるが、グスク(城)が建造される 12 世紀頃になると、琉球列島全体が同じ文化圏に統合された。

図1は各ハプログループの頻度を表示したもの、図2は頻度をもとに集団ごとの類似度を計算してクラスター分析シンドログラムで表示したものと見受けられるが、北海道縄文人が他の集団と大きく離れて位置していること、他の集団との類似度が低いこと、つまり他の集団とは非常に異なった系譜をもつ

集団であることが読みとれる。この時分析した北海道の縄文人の DNA は、地図で見ると登別の西側に当たる噴火湾周辺の遺跡と 1 例のみは礼文島船泊遺跡のものであるが、北海道縄文人のハプログループ D のサブグループである D1 は、沿海州の先住民集団を除いては現代日本人や東アジアの大多数の集団の中には見出せない特殊なもので、それはアメリカ先住民と同じタイプのものである^[13]。また、既出のように松本説は「日本民族は北方型蒙古系民族に属するもので、その起源はシベリアのバイカル湖畔にある」^[14]と結論づけた。

こう見てくると、松本説の北方説に対し、篠田説は二重構造論の色彩が強い。が、日本文化圏の深層を究明するには、まだいくつかの疑問が残る。篠田説から、北海道縄文人および沖縄の集団が日本文化圏の深層を形成していたのではないかと推測したくなるが、この資料だけでは 1) 北海道縄文人と上古アイヌとの新古関係⁽⁴⁾、2) 沖縄における宮古・先島諸島、さらには佐渡島との新古関係が解明できないからである。

4. 自然環境からの検証

生活できそうな自然環境があつてこそ渡来人の集団は生きていける。原始時代以来の日本の文化を安田喜憲は「森の文化」^[15]と呼んだ。縄文人と森林との結びつきはとても強かったようで、森本孝^[16]は、こう述べている。

縄文人たちはそうした小地域の中に産するさまざまな自然の恵みを自らの糧として生活を営んできた。海岸・河川に近い集団は魚・貝類をはじめとする水産資源を利用し……平地・丘陵にすむ集団は豊かな日本の森林のもたらすさまざまな恵み、ドングリ類・トチ・カヤ・クリ・ハシバミ等の木の実類から、ヤマノイモ・クズ・カタクリ・ユリ根といった根菜類を多量に利用したことであろう。

トチ・カヤ・クリ・ハシバミ・ミズナラなどはブナ科に属す樹木であり、この点に着目すると、日本民族の基層文化について論じた佐々木高明(1993)の説^[17]が興味をひく。

- (1) 1万3千年前頃には東北アジアと華南方面から細石刃文化が流入。
- (2) 縄文時代前期～中期頃(約6千年前～4千年前頃)に照葉樹林文化の要素を有するものが日本列島西部に進出。
- (3) 日本の照葉樹林文化は弥生文化を形成していく(図3の照葉樹林帯の分布を参照)。
- (4) 照葉樹林とは葉の表面の照りの強い樹木(椎・榿・楠・椿など)からなる樹林帯である。
- (5) 稲や里芋の栽培、餅・茶・味噌・コンニャクなどの食品作り、柱と梁で重量をささえる高床式住まいなどの生活文化をもつ。

ブナ・榿・栗・椎などとともにブナ科に分類されるミズナラは落葉高木で、山地のやや高い所に多く、ドングリの実をつける。トチ(榿)はトチノキ科の落葉高木、カヤ(榿)はイチイ科の常緑高木、ハシバミ(榛)はカバノキ科の落葉低木である。一方、照葉樹林は常緑広葉樹の椎・榿・楠などからなる樹林帯で、これを特色づける文化を照葉樹林文化と呼んだ^[18]。

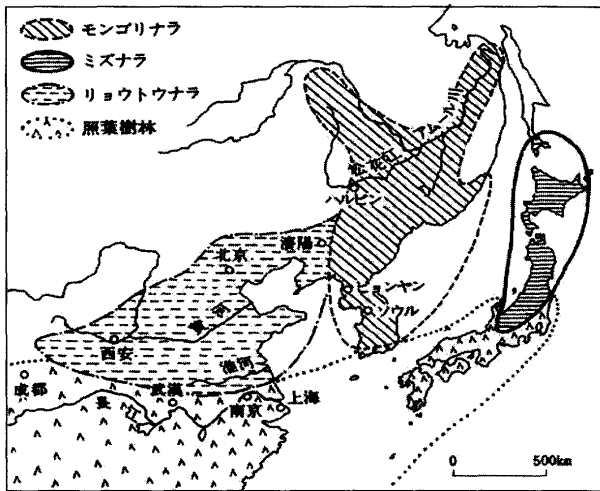


図3 ナラ林帯の分布 (佐々木 1993)

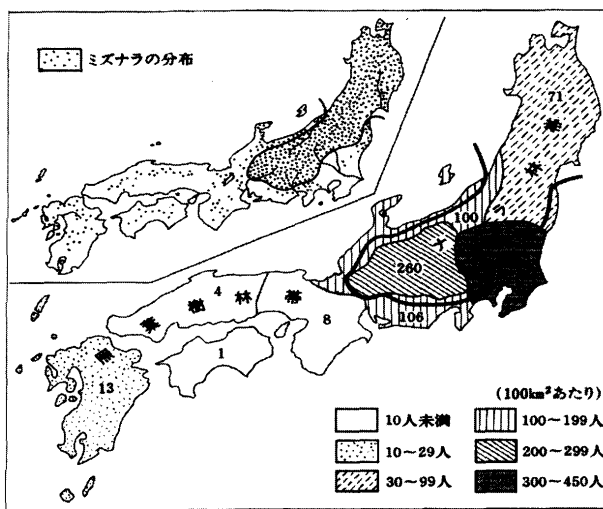


図4 縄文中期の人口・森林分布 (佐々木高明 1993)

図3は、東日本のミズナラ帯はアムール川流域を含むモンゴリナラ帯や中国リョウトウナラ帯とともにナラ林帯を形成、西日本は中国北部・中東部とともに針葉樹林帯を形成していて、自然環境の違いがからくる生活文化の違い、つまり森林狩猟・沿岸漁撈民族型文化と農耕型文化との違いを物語っているとも読みとれる。森林狩猟型文化圏では狩猟に伴う生活圏の移動があったであろうから、篠田謙一(2007)で見た礼文島泊遺跡と噴火湾周辺の遺跡では距離が離れているにもかかわらずハプログループ頻度が類似していたのも当然と言える。

図3では、ロシア・朝鮮半島とのつながりをもつミズナラ帯が東日本に、中国南部とのつながりをもつ照葉樹林帯が西の本に分布していて、これはこれまで見てきた東日本文化圏対西日本文化圏という生活圏上の大きな区分とも合致していて肯ける。

ただ、図3だけではミズナラ帯文化圏と照葉樹林帯文化圏の新古関係は分かりにくい。そこで、第3節の小山修三(1978)の中で使われた「縄文各期の地域別人口構成比推移グラフ」のデータを図3に組み入れて佐々木高明(1993)が作成した図4^[9]をもとに検討していくことにする。

小山のグラフは縦軸に人口の構成比を%で表示し、横軸は右

に向かって縄文早期(8100年前)、縄文前期(5200年前)、縄文中期(4300年前)、縄文後期(3300年前)、縄文後期(2900年前)、弥生期(1800年前)、土師期(1250年前)を示しているのだが、最も古い縄文早期(8100年前)の人口は、関東が最も多くて約50%を占める。次いで中部が約15%、東北が約10%、西日本が約25%であり、佐々木のいうミズナラ帯で70%強となっている。佐々木が問題にした縄文中期は、関東が約30%程度に減少する一方で中部・北陸が増えて約35%になるという変化がみられ、西日本は約10%にまで落ち込んでいる(西日本の人口が急激に増えだすのは弥生時代初頭に入ってからである)。

小山の縄文中期の人口データをミズナラの地理的分布に重ね合わせたのが佐々木の図(図4)である。人口の多いのは関東と中部であり、縄文中期文化圏の中心が関東・中部にあったこと、縄文中期の文化圏は東日本のミズナラ帯において顕著であること、照葉樹林帯の九州にも東北の3分の1程度の人口密度で人が住んで生活文化圏がなりたっていたこと、近畿・中国地方にはほとんど人が住んでいないこと、別の言い方をすれば近畿・中国地方の文化圏はこの縄文中期では未発達であることが分かる。

5. 農耕文化圏からの検証

生活あつての文化である。甲元真之・山崎純男(1984)の「東アジアの初期農耕類型」^[20]をもとに作図しなおしたのが図5である。この図において「中国江南からとみられる稲」が「粟・麦」と混交した地域こそが、「倭人」の原郷とみられる^[21]と安本美典(1991)は説く。図5では、

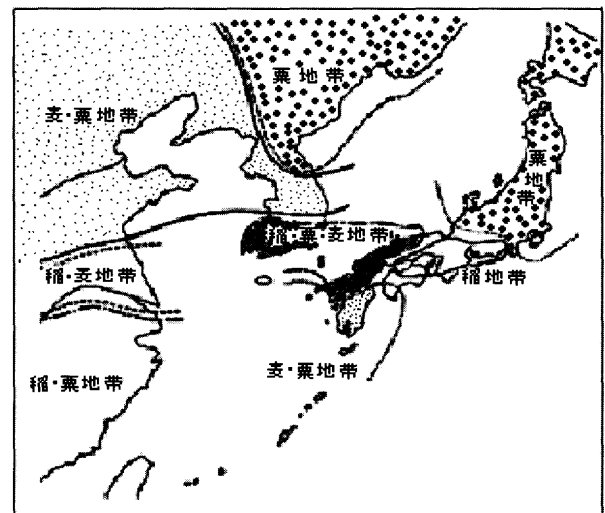


図5 粟・麦・稲の伝来 (甲元・山崎 1984 を改変)

- (1) 東日本はアジア北東部とのつながりを有する粟地帯。
 - (2) 中国北部・朝鮮半島南部とつながる北九州北部・隠岐・雲伯辺りの稲・粟・麦地帯。
 - (3) 中国北部とつながりをもつ九州中南部の粟・麦地帯。
 - (4) 近畿および瀬戸内の一部からなる稲地帯。
- に分けられている。この九州中南部は隼人文化圏と見ていいであろう。粟の栽培が古く稲が最も新しいこと、これに松本説や

佐々木説を考え合わせると、日本において(1)が最も古く、次いで(3)→(2)→(4)の順になる。

6. 方言論からの検証

平山輝夫『日本の方言』や『現代日本語方言大辞典』は、日本の方言を図6のように区画した⁶⁾。具体的な区画は次のようになる。区画に藩領名の表記が混在しているのは、方言区画が県境よりは藩領の境界と一致することが少なくないからである。

▽本土方言

東部方言：北海道方言、奥羽方言、関東方言、越後方言、東海・東山方言、北部伊豆諸島方言

八丈方言：八丈島方言、青ヶ島方言、小島方言

西部方言：北陸方言、近畿方言、四国方言、中国方言、雲伯方言

九州方言：九州東部方言（豊前・豊後・日向）、九州西部方言（肥前・肥後・筑前・筑後）、九州南部方言（薩摩・大隅・諸県）

▽琉球方言

奄美・沖縄方言：奄美方言、沖縄方言

先島方言：宮古方言、八重山方言、与那国方言

東日本と西日本とは異なる言語文化圏であることは、『日本語地図』のさまざまな方言の東西分布から見ても明白である。おおまかにいえば、新潟県の親不知子不知から岐阜県・愛知県の西側境界線を通して浜名湖にいたる線が東西方言の境界線である。この大境界線に接する岐阜県などの接地域域では東部方言と西部方言の混交が見られ、複雑な言語現象が生じている。

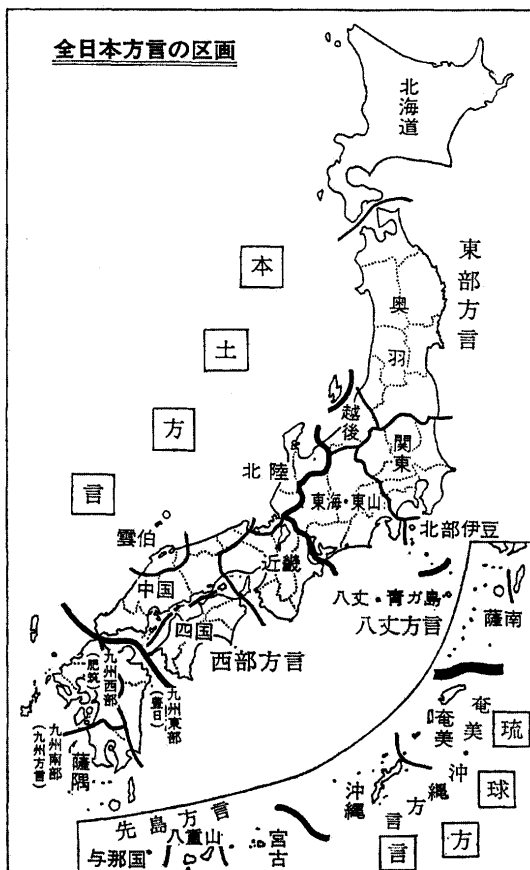


図6 日本の方言区画(平山輝男 1968)

西部方言でも雲伯方言は他と異なると特徴を有するし、西部方言と九州方言はかなり違う。

方言区画は、アクセント、母音の数、母音の無性化、四つ仮名の有無、語中尾子音の濁音化、シラビーム、係り結びの残存、用言の活用形、古い語系や意味の残存、語彙体系の違いといった方言特徴などを総合的に判断して認定されるが、アクセント一つにしても、東京式アクセントと京阪アクセント、2型アクセント、1型アクセントの地域では目立った型の違いが観察され、複雑な変化型も現れる。

日本の文化圏の系譜を考究するときに極めて重要な地域となる九州は、アクセントでは九州北東部の東京式アクセント地域、佐賀県・長崎県・鹿児島県などの九州二型アクセント地域、都城の一型アクセント、宮崎県の無アクセント地域などが存在して細かく分かれており、九州が渡来人による歴史的な大変化を重ねてきたことを物語っている。九州は音韻・語法・語彙の諸特徴を比較検討すると、九州北部と中南部とを別の方言圏・言語文化圏であるとするのが最も妥当である。

第6節で九州北部との近縁性が明らかにされた中国地方北部の雲伯方言(島根県出雲や伯耆)、そして隠岐島や鳥取では(a)中舌母音のイとウ、クァ・グァ・フゥなどの古音が観察されるほか、(b)隠岐島では語中尾のリ・ルが促音や撥音になる、(c)動詞・形容詞のウ穩便系がないなど傾向が見られるといった特徴があることから、中国地方方言とは異なる方言域と見ていい。

沖縄本島・先島諸島などの南西諸島は、どうか。アクセント、母音の融合、係り結びの残存、用言の基本形と活用形、古い語系や意味の残存、語彙体系の違いなどから判断して、沖縄本島・奄美・屋久島・種子島などの集団(奄美沖縄)と、宮古島・石垣島・与那国島(先島)の生活集団とは異なる言語文化圏に属するものと判断できる。

7. 残る問題の検討

第4節で二つの重要な疑問点が残っていた。1)北海道縄文人とアイヌとの新古関係、2)宮古・先島諸島と奄美・沖縄諸島・佐渡島との新古関係が解明できないという疑問点である。

まず、1)の北海道縄文人とアイヌ人については、これを同一集団と考えることもできなくはないが、問題である。松本秀雄(1992)105頁の表「日本人集団におけるGm遺伝子の分布」のデータをクラスター分析(原データの距離計算にユークリッド平方距離、合併後の距離計算にワード法を使用)してデンドログラムで表示して図7を作成し、Gm遺伝子を基準にした各地の日本人集団の近縁関係を見ると、佐渡は鹿児島県の奄美大島や屋久島などと小クラスターをなし、さらには仙台・東京・奈良・大阪・大分などと中クラスターをなしている事実から判断すると、アイヌ・宮古島・石垣島・与那国島からなる集団とは別の文化圏といえるからである。同時に、アイヌ・宮古島・石垣島・与那国島、言い換えれば北海道アイヌの集団と沖縄宮古・先島諸島の集団は他の日本人集団とは距離のある、きわめて古い集団であると認定できる。

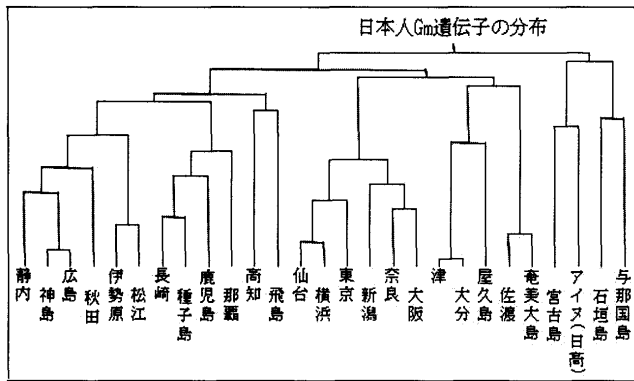


図7 日本人 Gm 遺伝子の分布 (松本 1992 による)

図7で静内とあるのは北海道日高郡静内のことであるが、この静内はデンドログラムでは「秋田・伊勢原・広島・神島・松江」と同一クラスターをなして近縁関係が強いのにに対し、アイヌ(日高)はデンドログラムの上ではきわめて距離の離れ類縁関係の薄いところに位置づけられているので、北海道縄文人と縄文アイヌ人とは別の集団に属すると認定すべきであろうか。

植原和夫は『日本人の起源』の中で「渡来人、すなわち北東アジア民族の影響をほとんど受けなかったのが北端のアイヌと南端の琉球人であり、したがってこれらの人びとは、現在でも縄文人の特徴をよく残していると考えられます」といい、安本美典『日本語の成立』は「音韻上・文法上の特徴を『全体的に』みたばあい、上古日本語に、もっとも近いのは、アイヌ語である」「アイヌ語について、上古日本語に近いのは、現代朝鮮語である」⁶⁾とする。そこで、本稿では北海道縄文人と上古アイヌ人とは別の集団として扱い、ここでは上古アイヌ人を最も古い集団と位置づけておくが、稿を改めて論じたい。

一方、2)宮古・先島諸島と奄美・沖縄諸島との新古関係に関しては、図7の宮古島・石垣島・与那国島のクラスターと奄美大島・屋久島(いずれも鹿児島県に所属)・那覇・種子島・鹿児島が近縁性の疎遠なクラスターに属していることから見て、日本文化圏の深層では別の文化集団とすることができる。

九州は図7で「長崎・鹿児島・種子島・那覇」が「大分・屋久島・奄美大島」とはかなり疎遠な位置で小クラスターをなしていることを重く見れば、地理的・方言的に近いという理由だけで鹿児島と奄美大島・沖縄本島とをクラスターとして括ることには問題点が残るものの、現有資料だけでは判断がつかない。

8. 推定される深層文化圏

本研究はまだ初期段階に過ぎないが、これまでの議論をまとめると、日本文化圏の深層は次のようになる(古い順に並べたが、現時点で判断のつきにくいものは同列に置いた)。

- (1) 上古アイヌ文化圏、北海道縄文人文化圏
- (2) 縄文宮古諸島・先島諸島文化圏
- (3) 粟地帯としての関東縄文人文化圏を中心とする縄文関東・東日本文化圏
- (4) 佐渡島文化圏、奄美大島・沖縄本島文化圏
- (5) 麦・粟地帯としての準人文化圏(北部を除く九州文化圏)

- (6) 稲・麦・粟地帯としての九州北部および隠岐・雲伯を中心とする中国地方北部文化圏
 - (7) 稲地帯としての近畿・瀬戸内を中心とする弥生文化圏
 - (8) 八丈島文化圏
- が生成され、変化が積み重ねられてきたのではなかろうかと推定される。

北海道縄文人文化圏と上古アイヌ文化圏を最終的には同列に置くことにしたのは、篠田謙一(2007)が提示した図1・図2および図7だけでは、その新古関係を実証することは難しいのではないかと判断したからである。今後発表されるであろう新しい知見を得た上で再検討したい。

(1)を(2)より古いと見るのは、図1・図2の沖縄人とアイヌ人のハプログループ頻度はあくまで現代の沖縄・アイヌの現代人集団のデータに過ぎず、第2節の松本説によれば奄美・琉球諸島の人々は内地の日本人集団よりも古いこと、アイヌと宮古は一般の日本人集団よりは古いことを拠り所にしたからである。

次に、(8)について。音韻・文法・語彙などの方言特徴(例えば連体修飾文の動詞がro語尾になる)を考慮すると(7)の近畿方言域より古い現象が観察されることから、(8)が(7)より古い可能性がないわけではないが、現状では資料が乏しいため、実証的な検討は今後譲る。

これまで議論してきたことをまとめると、日本文化圏の深層は次のような4段階を経てできあがったのではなかろうかと結論づけられる。

- 第I期日本文化圏:(1)上古アイヌ文化圏、北海道縄文人文化圏、(2)縄文宮古諸島・先島諸島文化圏(図8)。
- 第II期日本文化圏:(3)粟地帯としての関東縄文人文化圏を中心とする縄文関東・東日本文化圏、(4)佐渡島文化圏、奄美大島・沖縄本島文化圏(図9)。
- 第III期日本文化圏:(5)麦・粟地帯としての準人文化圏(九州北部および隠岐・雲伯を中心とする中国地方北部文化(図10)。
- 第IV期日本文化圏:(7)稲地帯としての近畿および瀬戸内を中心とする弥生文化圏、(8)八丈島文化圏(図11)。

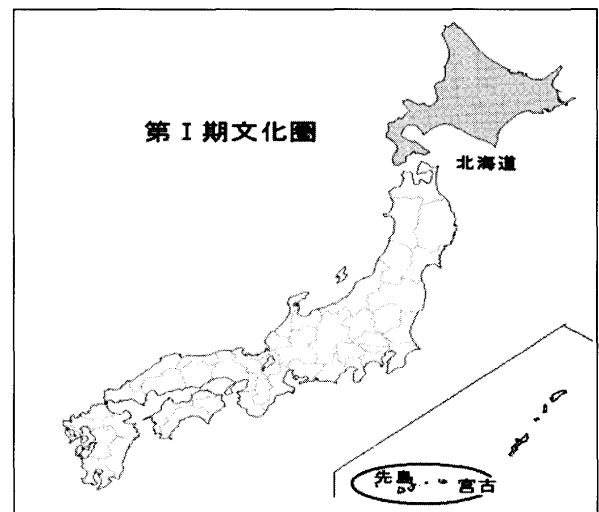


図8 第I期日本文化圏

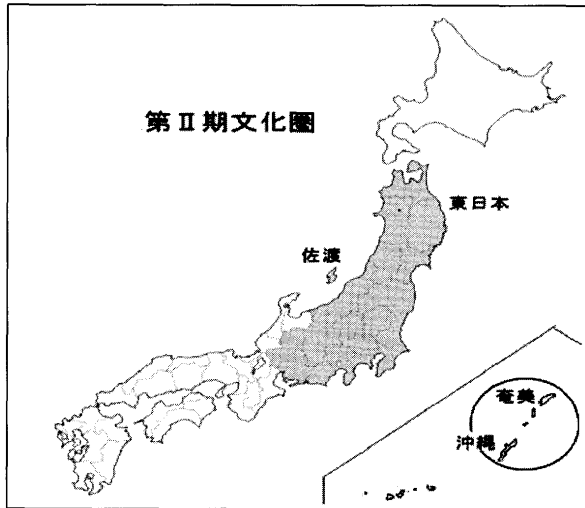


図9 第二期日本文化圏

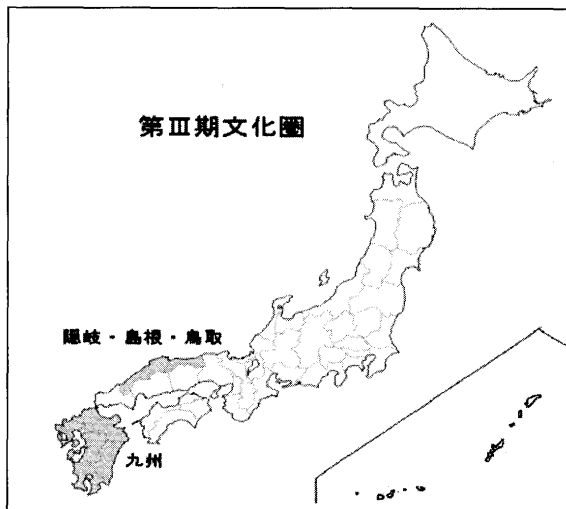


図10 第三期日本文化圏

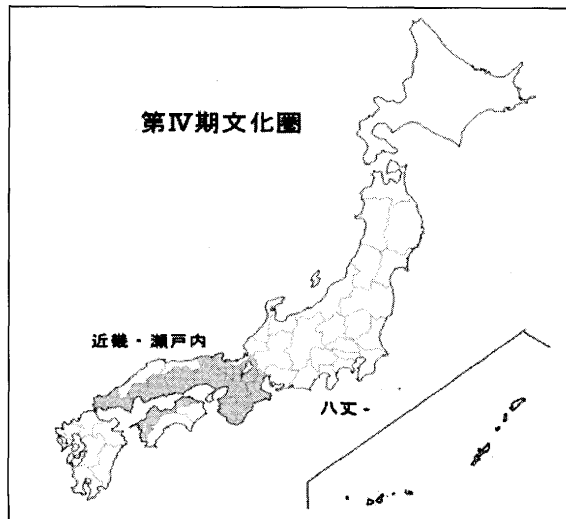


図11 第四期日本文化圏

を対象に24項目について実施した。平成23年度以降(複数年)は若年層と老年層の被調査者の数を増やして全国規模での調査を行う予定である。調査方法はWeb調査と臨地調査の併用によって文化圏の確認を行った後、境界線が走ると予想される地域については臨地調査を行いたい、予備調査の結果を待って最終判断する。上位文化圏境界線付近被調査者の数は、可能な限り多くとりたい。調査項目の柱は次のとおりである。

- Q1 森や林にはミズナラが多いですか、照葉樹林が多いですか?(写真を添える)
- Q2 今でも焼き畑農業の行われている所がありますか?
かつて行われていたと聞いたことがありますか?
- Q3 お正月にはお餅を食べる習慣がありますか?
- Q4 どんな雑煮がお正月の伝統ですか?
- Q5 お正月や他の行事の儀礼食としてサトイモ(里芋)などのイモ類が使われますか?
- Q6 普段でも餅, 粽(チマキ), お強(オコワ)がよく食卓のほりますか?
- Q7 寿司は江戸前(新鮮なネタを使ったにぎり寿司で, マグロをはじめとする赤身のネタが中心)ですか関西風(飯が六分, ネタ四分, ネタはタイなどの白身が多く, 箱型の寿司)ですか?
- Q8 てんぷらとは, ころも揚げのてんぷらのみをいいますか, さつま揚げもてんぷらといっていますか?
- Q9 ご飯を握るときは, 三角型の「おにぎり」にしますか, 俵形にして黒ゴマなどをふりますか? それともボールのような丸い形に握りますか?
- Q10 食べ物の「きつね」「たぬき」はどんなものを指しますか? 油揚げをのせた蕎麦・饅頭ですか, 天カスの入った蕎麦・饅頭ですか?
- Q11 ご家庭で使う醤油はどれですか? 大豆と小麦をほぼ等量に使う濃口醤油ですか, 大豆に小麦または米を使った薄口醤油ですか?
- Q12 「わたしの茶碗」「わたしの箸」という習慣が残っていますか?
- Q13 山の神の信仰がありますか?
- Q14 八月十五夜に月にスキや団子を供える信仰がありますか?
- Q15 打消しには「ナイ」と「ン」のどちらをよく使いますか?
- Q16 「人がいる」ことを方言で表現するときには, 「イル」といいますか「オル」といいますか?
- Q17 「(ご飯を)炊く」「(大根を)煮る」は方言で何といっていますか?
- Q18 アカイを「明るい」意味で使うことがありますか?
- Q19 親指を立てると, どんな意味になりますか?
- Q20 小指を立てると, どんな意味になりますか?
- Q21 次のような動作を, 方言で何といっていますか? ①膝をそろえずに畳に座る, ②膝をそろえて正座する, ③椅子に腰を下ろす, ④足を組んで畳に座る。
- Q22 他人の家を訪ねたときに, 玄関で何と声をかけますか?
- Q23 「怠け者」「不用者」を表す方言がありますか?

9. おわりに

なお, 第1節で触れた, 自然文化圏・食文化圏・習俗文化圏・しぐさ文化圏などについての予備調査は, 平成22年度は18~23歳の若年層(東日本出身者65名, 西日本出身者5名)

Q24 「放蕩者」を表す方言がありますか？

この予備調査は、調査を進めながら順次データを集計しているところであるが、あくまでも共時態の調査であるから、日本文化圏の深層に重大な影響を及ぼすような成果は望むべくもないものの、年代層という主体の違いが文化の認知差にどの程度の変化を与えているのか、現代の日本文化圏が図4～6の境界線や区画とどの程度ズレた結果を見せるのか、言語や生活の平準化を映して文化圏にも平準化の波がどの程度押し寄せているのかなどが明らかになるはずである。Q9「おにぎり」では東日本で勢力をもつ三角形や丸型のおにぎりや、Q12「わたしの茶碗」「わたしの箸」という習慣を九州の若年層被験者が回答するなど、日本文化平準化のデータも散見されつつある。

本稿では、資料の関係で最も古い文化圏を縄文早期（8100年前）として論じてきた。それよりさらに古い時代の科学的なデータがいずれ世に出てこよう。文化人類学・考古学・植物学・医学などでの研究が画期的な知見を提供してくれる日を待ちながら、情報文化学的な見地からの研究を積み重ねていきたい。

注

- (1) 平成3年に放送文化基金による「多文化調査」を実施、その結果を「文化の認知差」（口頭発表、第2回情報文化学会、平成6年）、「日本文化の認知差」（『情報文化学会誌』第2巻第1号、平成7年）、「日本語語彙の研究」（武蔵野書院、平成8年）、「比較文化学の研究に向けて」（『情報文化学研究』第3号、情報文化学会、平成17年）等で公にしてきた。これらのデータをもとに本稿第9節に示した調査項目を策定した。
- (2) 松本秀雄『日本人は何処から来たか 血液型遺伝子から解く』日本放送出版会、によれば白人種と黒人種が分化したのが約12万年前(p.95)、白人種と蒙古系が分化したのが約6万年前(p.96)、紀元前1万3千年頃と判断される細石刃が日本にも分布していたこと、「ab³st 遺伝子」の流れからみて、日本人の渡来時期は今から約1万数千年以上前と推測される(pp.118-119)。
- (3) 『日本経済新聞』（2009.9.30は事実の報道にとどめたが、『産経新聞』（同）は「おそらくアジアの旧人によるもの」とコメントした。
- (4) 北海道稚内の左に位置する礼文島の方言は、シラビックな音韻構造や特異な文法・語彙形態など上代日本語の特徴を多分に残している古い方言ではあるものの、図1・図2の北海道縄文人と関東縄文人は縄文人、北海道アイヌ、沖縄・現代本土日本はあくまで「現代人」であることを忘れてはならない。
- (5) 図6は平山輝男(1968)『日本の方言』講談社、p.74によるが、この区画は同(1979)『全国方言基礎語彙の研究序説』明治書院、同(1992)『現代日本語方言大辞典』明治書院でも変わらない。
- (6) 安本美典(1991)『日本語の成立』では「語頭にr音が立たない」「単語は原則として母音で終わる」など音韻9項目、「形容詞は名詞のまえにおかれる」など文法3項目、「みみ」「あし」など200の基

礎語について、東京方言・アイヌ語・首里方言など20言語28種と比較、調査データをコンピュータ分析して近縁関係を論じている。アイヌの言語文化や世界観については片山龍峯(1993)『日本語とアイヌ語』すずさわ書店、山田孝子(1994)『アイヌの世界観』の指摘が示唆に富む。

参考文献

- [1] 篠田謙一：『日本人になった祖先たち DNAから解明するその多元的構造』、日本放送出版協会、p.157(2007)、埴原和郎編：『日本人の起源』、朝日選書、p.23(1984)。
- [2] 国立科学博物館：「国立科学博物館110周年記念日本人の起源展」、(1988)、安本美典：『新説 日本人の起源』、JICC出版、(1990)、同：『日本人と日本語の起源』、毎日出版社、p.151、(1991)。
- [3] <http://www.kodai-bunmei.net/bbs/bbs.php?i=200&c=400&m=9505>
- [4] 松本秀雄：『日本人は何処から来たか 血液型遺伝子から解く』、日本放送出版会、pp.105-108,118-120,176-177。(1992)。
- [5] 同上：p.51。
- [6] <http://www.riken.jp/r-world//info/release/press/2008/080926/detail.html>
- [7] 佐々木高明：『日本文化の基層を探る ナラ林文化と照葉樹林文化』、日本放送出版協会、p.7(1993)。
- [8] <http://www2u.biglobe.ne.jp/~itou/nihonjin.htm>
- [9] <http://www.jinruisi.net/bbs/bbs.php?i=200&c=400&m=9505>
- [10] 前掲書 [1]、p.58
- [11] 小山修三(1978) "Jomon Subsistence and Population", *Senri Ethnological Studies* 2.『縄文学への道』
- [12] 前掲書 [1]、p.33-35-58、pp.120-121,p.138-140-46、pp.167-169
- [13] 同上、p.170
- [14] 前掲書 [4]、p.177
- [15] 安田喜憲：『列島の自然環境』（『日本通史』1、岩波書店、(1993)
- [16] 森本孝：『歴史読本』第30巻19号、新人物往来社、p.52
- [17] 佐々木高明：『日本文化の基層を探る ナラ林文化と照葉樹林文化』日本放送出版協会、p.6-7-32-33-44(1993)
- [18] 前掲書 [17]、pp.18-19、新村出編：『広辞苑』第六版。
- [19] 前掲書 [17]、p.64
- [20] 甲元真之、山崎純男：『弥生時代の知識』、東京美術、(1984)
- [21] 安本美典：『日本人と日本語の起源』、毎日新聞社、p.13、(1991)

平澤 洋一（ひらさわ よういち）

東京都立大学大学院人文科学研究科修士、國學院大學日本文化研究所研究員を経て城西大学教授、博士（経営情報学）。

松永 公廣（まつなが きみひろ）

大阪大学大学院工学研究科満期退学、博士（人間科学、大阪大学）、摂南大学大学院教授。

鄭 淑源（てい しゅくげん）

2010年立教大学大学院博士前期課程修了、前北京NTTデータジャパン。